

櫻井本『夢想之連歌』訳注（三）

伊藤伸江・奥田 勲

宗祇の句集『宇良葉』には、集の末尾に三種類の独吟百韻が置かれている。このうち二番目の百韻である『夢想之連歌』の訳注を試みており、本稿では、百韻の第二十句から第五十句までを注釈する。本稿は伊藤が作成し、奥田との検討会議を経たものである。

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の『夢想之連歌』である。対校本は次の諸本を参照している（ゴシック体は略号である）。「櫻井本『夢想之連歌』訳注（一）」に諸本の説明をなしているので、必要に依り参照されたい。

- ①早 早大伊地知文庫『古連歌』本（文庫20／26）
- ②書 書陵部『古連歌集』本（353―41）
- ③大 大阪天満宮『名家連歌』本（大阪天満宮文庫69―25―1）
- ④夢 東大国文学研究室蔵本（中世12―7―2）

- ⑤ 歴 国立歴史民族博物館高松宮旧蔵本 (H-600-1486 ム函181)
- ⑥ 宗 書陵部『宗祇独吟連歌』本 (154・515)
- ⑦ 北 北海学園大学北駕文庫本 (文 365)
- ⑧ 東 東大国文学研究室蔵『連歌名句』本 (D 1613)
- ⑨ 広 広島大学福井文庫本 (国文/5051/N 70)
- ⑩ 静 静嘉堂文庫本 (連歌集書29所収本)
- ⑪ 甲 大阪天満宮 (れー甲ー6) 本
- ⑫ 小 小松天満宮蔵『集懷紙』本
- ⑬ 滋 大阪天満宮滋岡文庫本 (れー5ー34)
- ⑭ 鳥 太宰府天満宮蔵小鳥居家本 (連歌74ー72)
- ⑮ 天 天理図書館綿屋文庫本 (れ4・2ー41)

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は翻刻(一)櫻井本『夢想之連歌』訳注(二)付翻刻(三)愛知県立大学日本文化学部論集』第十一号・二〇二〇・三(三)を適宜参照されたい。注釈本文においては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はあらため、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、【校異】においては、底本の翻刻に対して、前掲対校本の番号により、校異を示した。表記による違いはとらな
い。また、⑬の右傍に存する、読みにくい文字の読みがなと見られる書き直しの朱書きは校異に入れないが、異

本注記と思われる朱書きは校異に入れている。また、⑧には式目関係の頭注が存するが、校異には入れず、必要に応じて訳注で触れることとする。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、【語釈】にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直した場合がある。

一、各句には、【式目】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのような作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮して【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には、【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

（初折・裏・十二） うつろへば露こそ月の都なれ

二十 秋の山にや旅を忘れん

【校異】 あぎのやま…③秋も名山にや ⑮山路や

【式目】 秋（秋の山） 旅（旅）

【語釈】 ○秋の山…秋の山の情景。以下にあげる例句からも、宗祇は寂しさの極みでありながら情趣ある場といったイメージをこの語句に持っていることがわかる。「月はくもらぬ河音のあめ／柴の戸をあけてむかへる秋の山／人とかしなひくらしそなく」（表佐千句第七百韻・紹永／専順／宗祇・64／65／66）。「さひしさは夕暮のみか秋の山／雲ふくかせに荻の葉のこゑ」（老葉（吉川本）・秋連歌・355／356／毛利家本（331／332）にも存する）。○旅…旅はつらさ、憂さを感じつつ進んでいくもの。「かすみつゝあり明のこる山にねて／たひのつらさをいつか忘れん」（聖廟法楽

千句第八百韻・53/54、『兼載独吟法楽千句註』は、54句について「ありあけのおもしろき山にてもたひのつらさのわすれかたきとにや」と注している。

【付合】「露」「月」から「秋の山」を付け、「旅」中と示して、見知らぬ山中での夜の旅寝の思いとする。月光に照らされた露が見せる美しい小宇宙こそ、旅寝のつらさを忘れさせるものとして詠んだ。

【一句立】秋の山の情趣に、旅をしているつらさを忘れられるだろうか。

【現代語訳】草が枯れて色あせると、そこに置く露、その露こそが、月を宿し、月の都となるのだなあ。秋の山の露の美の情趣に、つらい旅をしていることを忘れられるだろうか。

(初折・裏・十三) 秋の山にや旅を忘れん

二十一 鳴く鹿にわが妻恋を慰めて

【校異】なくさめて…④なくさみて

【式目】秋(鹿) 恋(妻恋) 鹿只一鹿の子一すがる一(二座三句物)

【語釈】○妻恋…夫や妻を慕わしく思うこと。鹿の声などの動物の声にもいう。「暁よりの月そつれなき／妻乞をうしとや鹿の音をたつる」(熊野千句第二百零韻・行助／道賢・20/21)。「露の布留野は笹分くる路／なれも鹿逢はで来し夜の妻恋に」(新撰菟玖波集・秋連歌上・慈照院入道贈太政大臣・695/696)。○わが妻恋…自らの夫(妻)を恋しく思う気持ち。ここは故郷の配偶者を思う気持ちとなる。「こゑたて、なきくらへはやのへのしか我つまこひの秋のうらみを」(伏見院詠草・181)。「わかつま恋もさそな鹿の音／たのめすはあけはつるまで月は見し」(看聞日記紙背永永廿七年閏正月十三日賦何人連歌・貞成親王／正永・10/11)。

【付合】秋の景物として「鹿」を付け、旅先での思いとして「わが妻恋」を付け、ここまで三句続いた秋から、恋への移りを用意する。

【一句立】妻を慕って鳴く鹿の声に、恋しい人への自分の思慕の思いをも重ねて心を慰めていて。

【現代語訳】秋の山の情趣に、つらい旅をしていることを忘れられるだろうか。妻を慕って鳴く鹿の声に、故郷にいる恋しい人への思慕をも重ね、心を慰めることで。

（初折・裏・十四） 鳴く鹿にわが妻恋を慰めて

二十二 逢はざらめやの夕だに憂し

【校異】 あは：⑧あと ゆふへたに：③夕暮そ ⑮夕くれに うし…①なし ⑤をし ⑥更し ⑩⑭なし

【式目】 恋（逢は・憂し） 夕（時分） 「恋の心、…うき人」（連珠合璧集）。

【語釈】 ○逢はざらめや…逢えないのであろうか。恋しきゆえの疑念。恋人と逢えるという希望と逢えない絶望の間で揺れ動く心中を表現している。和歌では「逢はざらめやは」と表現するところ。連歌では「くざらめや」の形で修飾語になる。「おなし世のたのみ計ははかなくて／あはざらめやと（を中静）命ともせし」（東山千句第二百零韻・雪／宗碩・15／16）。○夕だに憂し…夕暮れ時さえ恨めしい。まして、その夕暮れが過ぎ、逢うことがかなわないとわかった夜は、さらにつらいとの含みがある。鹿の鳴く声が夜間に聞こえることを響かせている。「一、だにと云詞、…又、さへと云に同きも候」（長六文）。

【付合】 「逢ふ」を用い、完全に句境を恋に転換した。

【一句立】逢えるかもしれないと期待している夕暮れ時さえつらいのだ（ましてや逢えないとわかった時は耐え難いつらさだ）。

【現代語訳】妻を慕って鳴く鹿の声に、私は恋しい人への自分の思慕の念を重ね、泣きながら心を慰めている。逢えないのかと気を揉む夕暮れ時さえつらいのだから（まして、逢えなかった夜は耐え難い）。

(二折・表・一) 逢はざらめやの夕だに憂し

二十三 さのみやはたのめし事のあだならん

【校異】 さのみやは…③きのみやは 事の…②事を

【式目】 恋(たのめ)

【語釈】 ○さのみやは…ひたすらくしてよいものか、いやよくない。「契りし末のさはらすもかな／さのみやはいたつら臥の小夜枕」(文明四年十月二十六日何路百韻「風や雲」・聖護院道興／専順・44／45)。「夜はまた明ぬ夢の行すゑ／さのみやはひとりねなんとたのむ身に」(表佐千句第二百韻・宗祇／専順・93／94)。前句で夕暮れのつらさを嘆いていることに対して、それだけではないと否定し、さらにつらい状況を示唆する。○たのめし事…あなたがまた来ると言って私に期待させた事。恋人との逢瀬の約束をいう。「夕くれと頼めし事も有物を／まつ人いかにかせは秋なり」(菟玖波集・恋連歌上・藤原長泰・780)。○あだならん…はかないものになってしまいうだろう。「つらきそなたもとかはおほえず／ちきはそこぬたくれもあたらん」(下草・恋連歌上・615／616)。

【付合】 逢えるかわからない夕暮れに不安な気持ちでいる様子を詠む前句に、時がたつに従い、恋の約束が不実なものであることがわかっていき、さらなるつらさが加わる様を付けた。時間がたてば望みを託していた恋人との約束はつきり破られ、愛されていない自分自身が明らかになる、つらい恋の様相。

【二句立】 あの人が、また来ると言って私に期待させた事がはかない約束となるばかりでいいだろうか、いやよくない。いや、それだけであろうか(そうではない)、あの人を信じて頼みにしていたのに、それが裏切られる(ことがつらいのだ)。

【現代語訳】 逢えないのだろうかと心配しながら待つ夕暮れ時の思いさえつらいのに、ましてあの人が、また来ると言って私に期待させた事がはかない約束となるばかりでいいだろうか、いやよくない。

(二折・表・二) さのみやはたのめし事のあだならん

二十四 恨みし心見えもこそすれ

【校異】 うらみし：①うらめし②うらみて 見えも：①見へす

【式目】 恋(恨み)

【語釈】 ○恨みし心：恨んだ気持ち。前句からは、私があの人^の薄情さを恨んだ気持ち。○見えもこそすれ：見えてしまつたら困る。「あたる人と見えもこそすれ／花ははや散ともしらす尋きて」(美濃千句第八百韻・専順／紹永・84／85)。

【付合】 前句で、期待がかなわないことが予想され、複数のショックが重なっていることがわかる。付句は、それでもまだ、恨みに思う気持ちが見えて、相手が自分に対して悪感情を持つ事を心配する、弱い立場の作者の句。

【一句立】 恨んだ気持ち^がわかつてしまふといけない。

【現代語訳】 あの人が、また来ると言つて私に期待させた事がはかない約束となるばかりでいいだろうか、いやよくない。恨んだ気持ちが見えてしまつたら困るなあ。

(二折・表・三) 恨みし心見えもこそすれ

二十五 たえねただ思ふにかなふ人もなし

【校異】 たえね：②⑥⑦⑧たへね⑬たえね^{へ敵} おもふに：⑪思ふハイ⑬思ふ^に

【式目】 恋(たえね・思ふ) 人(人倫) 人倫与人倫(可嫌打越物)

【語釈】 ○たえねただ：ただもう絶えてしまふ。「たえねただ石まづたひに行く水のすゑも逢瀬の頼みなければ」(続千載集・恋歌二・中臣祐世・1237)。「ありしおもひに山もこそなれ／たえねたゝいもせもよしや吉野川」(老葉(毛利家本)・恋連歌上・893／894)。「絶ゆ」(ヤ行下二段)ではなく「耐ふ」(ハ行下二)ととり、「たへね」とする対校本も

ある。その場合、「ひたすら我慢しなさい」との意になる。○思ふにかなふ…思うようになる。「よしさらばあるにまかせてすぐしてん思ふにかなふ浮世ならねば」(新後撰集・雑中・題知らず・権僧正尊源・1416)。「いつわりのみのあけ暮はうし／誰も世はおもふにかなふ道ならて」(下草(宮内庁書陵部本)・雑連歌下・1177/1178)。「はるかなる道の手向を取そへて／おもふにかなへいのるゆく末」(伊庭千句第四百韻・宗長／聴雪・27/28)。

【付合】隠し切れない恨みに、いつそ恋を捨ててしまえと、諦観から自暴自棄になる心情をつける。

【二句立】私たちの仲は、ただもう切れてしまえ。こちらの思うようになる人などいないのだから。

【現代語訳】恨んだ気持ちが見えてしまうと困るのだが。えいもう二人の仲よ。切れてしまえ。こちらの思うようになる人など誰もいないのだ。

【他出文献】『下草』には、龍谷大学本(雑下929・930)、金子本(雑下1079・1080)、東山御文庫本(雑下1073・1074)等、草案本、初編本、再編本いずれにもこの付合が入る。

(二折・表・四) たえねただ思ふにかなふ人もなし

二十六 安げなる身もよそ目なりけり

【校異】 やすけ…⑧やすけ やそ目成けり…よそめ成^けけり

【式目】 雑 人倫(身) 人倫与人倫(可嫌打越物)

【語釈】 ○安げなる身…気楽そうに見える身。「おもひいれぬは身をやすけなる／たえしまのうらみをふたりかたる夜に」(下草(東山御文庫本)・恋連歌下・741/742)。和歌では「安げなし」を使い世のつらさ、住み憂さを詠む歌が見られる。「をりをりにことこそかはれ身のうさを思ふ心のやすげなの世や」(新拾遺集・雑中・貞和百首歌たてまつりし時・入道二品親王法守)。○よそめ…端から見た様子。傍目。「しらくものさわぐとみるははる風のさくらふきまくよそめなりけり」(有房集・さくら・21)。

【付合】 誰しも思うようにならないことを、世の道理として付句に述べ、前句の解釈を恋から雑へと変えて句境を転換する。

【二句立】 気楽そうな身も、はたから見ても見えるだけなのだよ。

【現代語訳】 ただもう付き合ひも絶えてしまえ。思うことがそのままかなうというような人などいないのだ。気楽そうな身だつて、はたから見ても見えるだけなのだよ。

（二折・表・五） 安げなる身もよそ目なりけり

二十七 水を友山を隣の草の庵

【校異】 水を友：①②⑨⑩⑪水音も 山をとりの：⑮山路を隣 草の庵：⑭中の庵

【式目】 雑 居所（庵） 水（水辺・用） 山（山類・体）

【語釈】 ○水を友：『宇良葉』本文ではこのように漢字を当てるが、校異では一部に「水音も」とする伝本が見られ「水音も」の可能性も考えられる。その場合には「山」に「止（や）ま（ず）」を掛けており、「水音も止むことのない、山を隣にしている、そんな草の庵」となる。ここは「水を友」の表記に従い、「水を友」「山を隣」と個別に草の庵に掛かると見ておく。その際には、水の流れを親しい友のように感じながら、山がすぐ隣に迫る庵で暮らすさまとなる。「此まゝにすみはつへくは山の奥／かすみをいのち雲水をとも」（老耳・1438／1439）。○山を隣：山を隣にして。

「うれしきはそむくにちかきうきよにて／山を隣にむすぶ柴の戸」（新撰菟玖波集・2844／2845・太政大臣）。

【付合】 「安げなる身」の具体的なありさまとして、清貧な閑居の様子を付ける。

【二句立】 流れる水を友とし、山を隣としている、そんな草の庵だ。

【現代語訳】 気楽そうな身も、はたから見ても見えるだけなのだよ。流れる水を友とし、山を隣としている、そんな草の庵に住む身であっても。

【他出文献】 二十六・二十七句は、『下草』1015（書陵部本初句「やすくなる」・1016に入る）。

（二折・表・六） 水を友山を隣の草の庵

二十八 夜深き霜に川風ぞ吹く

【校異】 なし

【式目】 冬（霜） 霜（降物・可隔三句物） 夜分（夜深き） 川風（吹物）

【語釈】 ○夜深き霜：夜更けに降りた霜。深夜の霜。「ささの葉の夜ふかき霜やこほらん月もあらしもさえまさるかな」（内裏百番歌合（承久元年）・冬夜月・範宗朝臣・164）。「ほのかなる音しもさむし山陰のよふかき霜に衣うつひと」（卑懐集・擣衣・34）。○川風ぞ吹く：川の風が吹く。前句の水が山を流れる川水であることを示唆。「よもすからいかたの床にをく霜をはらふもさむき河風そふく」（後花園院御集・筏上霜・1016）。「程遠き洲崎に鷺のあさりして／秋ふけわたり川風ぞ吹く」（寛正六年正月十六日何人百韻・幸綱／宗祇・95／96）。

【付合】 川が近くを流れている、山の草庵の、凍てつく冬の夜の情景を付けた。

【一句立】 夜が更けて降りた霜に、川風が吹いている。

【現代語訳】 流れる水を友とし、山を隣としてすごす、そんな草の庵だ。夜も更け、降りた霜の上には川風が吹いている。

（二折・表・七） 夜深き霜に川風ぞ吹く

二十九 立つ鴛の跡を浮き寝の声侘びて

【校異】 鴛①③⑨⑩⑪⑬⑮ をし②④⑦⑧⑫ 鴛⑭ おし⑤⑥

【式目】 冬（鴛） 動物（鴛）

【語釈】○鴛…をし。オシドリの古名。「鴛鴦」とも。「鴛鴦」の鴛は雄、鴦は雌。カモ科の鳥で、雌雄のつがいで離れず行動する性質がある。底本は「鴛」であり、雄のオシドリが飛び立つことになる。○浮き寝…水鳥が水に浮かんで寝ること。「浮き」に「憂き」を掛ける。オシドリや鴨、千鳥などに詠まれる。「この頃のをしのうきねぞあはれなるうはげの霜よ下のこほりよ」（千載集・冬・百首歌めしける時、よませ給うける・432・崇徳院）。「こほる夜は梢をしのうきね哉」（自然齋発句・水鳥・1486）。○声詫びて…声がつらそうで。「さえ渡る夜そ橋に霜降／かさゝきの嵐にまよふ声わひて」（萱草・雑連歌・1213／1214）。

【付合】霜が降りる寒い夜の溪流の情景に視点を移し、オシドリの浮き寝の様をつけた。飛び立つ羽音、鳴き声と、音で深夜の情景を表現している。

【一句立】鴛が飛び立ったあとには、つらい浮き寝をしている残された鳥の声が悲しげに聞こえて。

【現代語訳】夜も更け、降りた霜の上には川風が吹き、川から鴛が飛び立ったあとには、つらい浮き寝をしている残された鳥の声が悲しげに聞こえて。

（二折・表・八）立つ鴛の跡を浮き寝の声侘びて

三十 一人や月の行方をも見ん

【校異】月の…⑧月や ゆくゑをも…⑮行末を

【式目】秋（月） 夜分（月）

【語釈】○月の行方…月の沈みゆく方向。「雲よりあとの明くる山の端／時鳥月の行方に声消えて」（新撰菟玖波集・夏連歌・智閑法師・47／478）。「明け方近く雁ぞ鳴き立つ／影薄き月の行方に雲引きて」（新撰菟玖波集・秋連歌上・三品親王・773／774）。○行方をも見ん…付合では、「をも」とあるところから、飛び立った鴛の行方に月の行方が重ねられる。

【付合】前句は、鴛鴦のつがいの片方である鴛鴦が飛び立ち、残された鳥が悲しげに鳴く様子を詠んでいた。付合では残された鳥の気持ちを推測する。

【二句立】私は一人で、月の沈む方をも見ようか。

【現代語訳】鴛鴦が飛び立ったあとには、残された浮き寝の鳥の声が悲しげに聞こえている。残された鳥は、飛び去った鳥の行方のみならず、月の行く方も見ているのだろうか。

(二折・表・九) 一人や月の行方をも見ん

三十一 わがさらむ秋の空かは待てしほし

【校異】 わかさらむ…⑦⑧明さらん⑩あけさらん⑪我さらむ⑫わかあさらん⑬残さらん かは…⑮には

【式目】 秋(秋の空)

【語釈】 ○わがさらむ…私がこの世から去っていくであろう。この句表現は他に管見に入らない。宗祇は、「わが秋」という表現で、恋人に飽きられた様を詠み、「山のはちかき」と形容することで、人生の終焉をも意識させた(↓後掲の永原千句例)が、この句では、特に「去る」を加えて、人生の終焉に強く結びつけている。「月さへや難面人にふけぬらん／山のはちかきわか秋の空／むさし野にかきりもしらぬ露分て」(永原千句第七百韻・正利／宗祇／兼載・81／82／83)。○秋の空…秋の空はわびしい物思いを感じさせる。「おほかたの秋のそらだにわびしきに物思ひそふる君にもあるかな」(後撰集・秋下・「あひしりて侍りけるをとこのひさしうとはず侍りければ、なが月ばかりにかはしける」・右近・423)。「心からながめて物をおもふかなわがためにうき秋の空かは」(続拾遺集・秋上・澄覚法親王・239)。この語は拳句にも使われる。○待てしほし…もうすこし待ってくれ。「はやくうらみて後やかはらむ／まてしほし世にあるへしの我心」(老葉・雑連歌下・1327／1328)。

【付合】前句の「月の行方」に自らの行く方を重ね、述懐の思いへと句境を転換していく。「月」に自らを思う点、第

四十三句の根底にある思索につながろう。「はじめなき月のゆくへに身をかへてさらば心のはてをさらばや」（拾遺愚草員外・一字百首・秋・48）。

【二句立】私が、この世から去っていく時となった、それを示す秋の空なのであるか、いや、今はまだその時ではない、もう少し待ってくれ。

【現代語訳】私は一人で、月の沈む方をも見ようか。そして、この空は、月だけではなく、私が世を去る時が近いことを示す秋の空なのだろうか、いや、今はまだその時ではない、もう少し待ってくれ。

（二折・表・十） わがさらむ秋の空かは待てしはし

三十二 いさや命の後の夕露

【校異】 いさや…⑪⑫いまや⑬いさや⑭今や

【式目】 秋（夕露） 述懐（命） 人倫（命） 「述懐の心、命玉のを」（連珠合璧集）。

【語釈】 ○いさや…さあ、どうだろうか。「まつこそ命いさや兼言／人はたゝ恋よはれとやこさるらん」（顕証院会千句第九百韻・時述／竜忠・24／25）。○命の後…命がなくなった後。死んだ後。「かはらじと契りしままの中ならばいのちの後や人にわかれむ」（新後撰集・恋五・行蓮法師・1158）。「よの外と思ふも猶やまよふらん／命の後の恋もわれよ」（永原千句第二二百韻・宗祇／宗哲・43／44）。「命の後のたよりならずや／おもひおくつゆとも見えよあさちはら」（春夢草・914／915）。○夕露…夕方に置く露。はかなく消えるものの象徴であり、人の命とそのはかなさをきさう。「露トアラバ、…消…命」（連珠合璧集）。「はかなさをわが身のうへによそふればたもにかかる秋の夕露」（千載集・秋上・崇徳院に百首歌たてまつりける時、よめる・待賢門院堀河・264）。「憂き秋何を思ひ残さむ／夕露の消えぬばかりに身は古りて」（新撰菟玖波集・雑連歌四・藤原俊通朝臣・3171／3172）。

【付合】 「わがさらむ」から「命」を付ける。

【一旬立】さあどうだろうか、今すぐにも消えるかもしれない私の命だ。この命が消えた後にも、はかない夕の露は置いてあるだろうか。

【現代語訳】この空は、私が世を去ることを示す秋の空なのだろうか、いや、今はまだその時ではない、もう少し待ってくれ。だがどうだろう、今すぐにも消えるかもしれない私の命だ。この命が消えた後にも、はかない夕露はまだ残っているだろうか。

(二折・表・十一) いさや命の後の夕露

三十三 草の原なごり忘れぬ人もがな

【校異】もかな…⑦⑧⑩もなし⑬もかな^な

【式目】哀傷(草の原) 人倫(人) 人倫与人倫(可嫌打越物)

【語釈】○草の原…『狭衣物語』、さらには『源氏物語』の以下に引く例歌により、墓所の意味で使われる歌語。連歌でも用例が多いが、中でも心敬が多く用いる。「尋ぬべき草の原さへ霜がれて誰に問はまし道芝の露」(狭衣物語・狭衣・45)。「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をばとはじとや思ふ」(源氏物語・朧月夜・103)。「草の原まで我そかなしき／古郷も霜夜の旅ねいか計」(老葉・旅連歌・637／638)。○なごり…わすれがたみ。面影。「なごりまで問もはかなき草の原思ひかをさし霜のふる郷」(再昌永正二年・695)。「とは、やなかれにし跡も草の原名残を露のかことばかりも」(雪玉集・如是縁・618)。

【付合】前句の「露」に「草」を付け、「草の原」により自らの死後に思いを馳せた句。「露トアラバ、…草」(連珠合璧集)。「たれをかとはんしらぬ夕くれ／さきた、は花もあはれめ草の原」(葉守千句第四百韻・宗友／肖柏・70／71)。

【一旬立】この草の原に、私の面影を忘れない人がいてほしいものだ。

【現代語訳】 どうだろう、私の命が消えた後にも、はかない夕露はまだ残っているだろうか。この草の原に露よりもはかなく消えた私の面影を、忘れない人がいてほしいものだ。

(二折・表・十二) 草の原なごり忘れぬ人もがな

三十四 桜うち散り里ぞふりゆく

【校異】 うちちり…②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮うつろひ ふりゆく…⑨⑩あれ行

【式目】 春(桜) 里(居所・体)

【語釈】 ○桜うち散り…桜がはらはらと散り。校合した本百韻の他伝本はほぼ全て「桜うつろひ」である。だが三十五句とのつながりを見ると、「桜うち散り」が相応しく(↓三十五句【備考】)、また宗祇は次における例句を『萱草』、『老葉』と重ねて入集させており、「桜うち散り」という形の句例があるので、ここは「桜うち散り」と考えておく。「蝶鳥のあそへる庭は長閑にて／桜うちちりかすむ山さと」(萱草(伊地知本) 200・201、老葉(毛利本) 143／144、愚句老葉176／177(自注なし))。「さくら花ちらばちらなむちらずとてふるさと人のきても見なくに」(古今集・春下・僧正遍昭によみておくりける・これたかのみこ・74)。「桜」を「うちちり」と表現した句例は、他に宗長の句、基佐集の句などがあり、宗祇の影響下にあるか。「桜花こゝやかしこも打散て／春の行衛やかたもしられぬ」(年次不詳何木百韻(花は色に)・17／18・宗長)。「又やハとなミたも花も打ちりて／しつかにくるゝはるのふる寺」(基佐集・67／68)。なお、「うつろふ」という語句は、第十九句に「うつろへば露こそ月の都なれ」、第五十句に「小萩うつろふいねがての里」と使われており、この点からも、本句は「桜うち散り」の可能性が高い。○里ぞふりゆく…里は古びていく。「おいにかたならふさとそふりゆく／いくはるにはなもくちきとなりつらむ」(文明十四年九月廿日何船百韻(「そめよなほ」・84／85))。

【付合】 三十三句では、自らがいなくなった後の時間を思い、自らを記憶してくれる他者がいることを願った。が、

三十四句の情景は、その自らのいない未来は、願いも虚しく、時と共に自らの残したはずの全ての痕跡が消えていく静謐な世界であることを示している。

【二句立】桜がはらはらと散り、里は古びていく。

【現代語訳】草の原に、その昔の名残を忘れない人がいてほしいものだ。だが、桜ははらはらと散り、里は古びていく。

(二折・表・十三) 桜うち散り里ぞふりゆく

三十五 たちなれし狩場のかた野春くれて

【校異】春くれて：①暮〜て⑦⑧⑩春過て⑬春暮^暮て⑭春□□(破損) かりはのかた野：④かたの、狩は ※⑮は本句欠

【式目】春(春くれて) かた野(名所)

【語釈】○たちなれし：立ち慣れ親しんだ。「年をへてみはしの前に立馴れしはな立花も昔わするな」(家良集・9、38)。「とまるも薄き袖の移り香/夏衣昨日は花に立なれて」(竹林抄・夏連歌・234・専順)。狩場に立ち慣れていることから、多くの命を殺した罪深い存在であることも示される。○狩場：狩猟をする所。「草木を見るも心こそあれ/深き野や狩場の鳥をかくすらん」(萱草(伊地知本)・雑連歌・1065/1066)。「なさぬ罪もや身に積もるらむ/心のみ雪のかりはのある、野に」(老葉(毛利本)・冬連歌・557/558)。○かた野：河内国の歌枕。現在の大阪府交野市から枚方市にかけての一带。禁裏御料の狩場があった。「御かりすとならの真柴をふみしだきかたのの里にけふもくらしつ」(堀河百首・鷹狩・源師頼・106)。「かたの、みの、雪のみかりば/はるかなるあまの川原の月出て」(那智籠(北野天満宮本)・3079/3080)。○春くれて：春の一日が暮れていって。または、春が終わっていって。「人もたつぬ故郷はうし/さくらさくみかきか原に春暮て」(老葉(毛利本)・春連歌・211/212(巻軸))。

【付合】「桜」に「かた野」を付けた。「桜がりトアラバ、かた野」(連珠合璧集)。「またやみむかたののみの桜がり花の雪ちる春のあけぼの」(新古今集・春下・摂政太政大臣家に、五首歌よみ侍りけるに・皇太后宮大夫俊成・114)。

【二句立】いつも狩に来て慣れ親しんでいた狩場の交野、ここも春の日が暮れていつて。

【現代語訳】桜がはらはらと散り、里は古びていく。慣れ親しんだ狩場である交野に、春の日が暮れていつて。

【備考】『伊勢物語』八十二段で、狩場の交野にある渚の院で、惟喬親王が桜の饗宴を催した際に、「世に中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(業平)、「散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき」などの和歌が詠まれた。この段を踏まえ、【付合】での根拠となる俊成歌が詠まれており、宗祇のこの付合も、そうした散る桜を惜しみ、過ぎ去る時の流れを思う心情をたたえている。さらに、いつも狩で生き物の命を奪っている人間も、時の流れの中で消えていく一つの命にすぎないことも示されている。

(二折・表・十四) たちなれし狩場のかた野春くれて

三十六 ありかやいづち雉子鳴く声

【校異】ありかや…⑮ありかは いつち…①②⑭いつく⑦⑧いのち 声…③なる④らん⑬なり⑭□(破損)

【式目】春(雉子) 動物(雉子)

【語釈】○雉子…キジ。キジ科の鳥。鷹狩の獲物である。「春の心、雉子」(連珠合璧集)。「やかた尾の鷹手にすゑて朝たてばかたのの原にきぎすなくなり」(堀河百首・鷹狩・藤原基俊・106)。「雪ふる野へをわくる鷹かり／き、すなくかた山さくらうつるひて」(宝徳四年千句第一百韻・梁心／賢盛・80／81)。「かへる野はらの袖のはる風／雉なく夕のかりは分のこし」(享徳二年千句第五百韻・量阿／之基・58／59)。

【付合】「かた野」に「雉子」を付けた。「雉トアラバ、春の野…片野…」(連珠合璧集)。なお、新式今案に「雉きじと云とても尚可為春、狩場とあるが、当該句は前句との関係から春の句。のきじは可為冬」。

【一句立】居場所はどこなのだろうか、雉が鳴く声がある。

【現代語訳】慣れ親しんだ狩場である交野に、春の日が暮れて行つて。居場所はどこなのか、雉が鳴く声がある。

(二折・裏・一) ありかやいづち雉子鳴く声

三十七 雪ながらかすむ外山の朝ごとに

【校異】なし

【式目】春(かすむ) 雪(一座四句物) 外山(山類・体)

【語釈】○雪ながら：雪がまだ残っているままに。「雪ながら山本かすむ夕かな」(水無瀬三吟百韻・発句・宗祇)。

「雪ながら野はうちかすむ朝毎に／家るけふれる冬のさむけさ」(桜井基佐句集(斑山文庫本)・冬・535/536)。○外山…人里に近い山。○朝ごとに：毎朝。朝な朝な。「色霞む籬の露の朝毎に／起みておしむ短夜の月」(熊野千句第四百韻・心敬／宗祇・93/94)。

【付合】雉子の鳴き声を聞く、その時と場所との説明を付ける。

【一句立】雪がまだ残っているまま霞んできている、人里近い山のあたりで、毎朝毎朝。

【現代語訳】雪がまだ残っているまま霞んできている、人里近い山のあたり、朝な朝な、どこにいるのか、雉の鳴く声がある。

(二折・裏・二) 雪ながらかすむ外山の朝ごとに

三十八 伊吹おろしぞ波に残れる

【校異】そ…⑪そ のこれる…⑬みえたるのこれる

【式目】雑 波(水辺・用) 伊吹(名所)

【語釈】○伊吹おろし…晩秋から冬にかけて、伊吹山のある北西の方角から美濃国へ吹き下ろす激しい寒風のこと。

伊吹山は、現在の滋賀県・岐阜県の県境に位置する山。ただし、以下の西行や正徹の歌例からは、滋賀県側に吹く寒風も「伊吹おろし」と呼んでいよう。「おぼつかないぶきおろしのかざさきにあさづまぶねはあひやしぬらん」(山家集・題しらず・1005)。「春ながら伊吹おろしは夜さむにて真柴折りたくみのの山中」(なぐさみ草・正徹・13)。「氷のみいふきおろしのあしろ木にひをさへよらぬやすの河浪」(草根集・網代辺水・719・宝徳三年(一四五二)十一月九日詠)。「舟いそげ月はと山のあさわたり／いふきおろしの秋さむきそら」(下草・秋・373/374)。○波に残れる…波立つ気配に見えていること。「みなと江やむらたつ蘆の冬かれて浪にのこれる風のをと哉」(言国詠草・湊寒蘆・745)。

【付合】付句により山から水辺へ、風の名を出すことで土地の具体性を付与しつつ場所を移した。一日一日わずかずつ暖かくなりつつある朝であっても、寒風がいまだ残ることを付句で示す。目に見えぬ風の強さを水面が波立つ様で詠む。↓【備考】

【一句立】伊吹おろしが吹き、その強い風が、波立つ水面の様子に残っている。

【現代語訳】残雪がありながらも霞んでいる、人里近い山のあたり。朝な朝な、伊吹おろしが吹いて、その強い風のさまは、水面に立つ波の雰囲気に残っている。

【備考】宗祇『浅茅』では、近江国内に「朝妻山」の項目を立て、左のように記述している。

近江国

朝妻山

90 今朝ゆきてあすはこんといふしかすがに朝づま山は霞たなびく

いぶきおろし 船

例歌は『万葉集』巻十、1817番歌であるが、「朝妻山」は既に『夫木抄』でも、例歌および例歌と連続する1818番歌を引用し、近江国に分類している。「恋ひ恋ひて夜はあふみのあさづまに君もなぎさとゆふはまことか」(新統古今集・家

にて百首歌よみける時、後朝隠恋・藤原為忠朝臣・1339、為忠家初度百首618)のように、平安末から朝妻を近江国の歌枕として詠む歌例もあった。さらに『浅茅』で関連して引かれる「いぶきおろし」「船」は、語釈で引いた西行の『山家集』歌(1005)が念頭に置かれている。それゆえ、宗祇も、「朝妻」を、天野川が琵琶湖に流れ込む琵琶湖の東岸の朝妻湊あたり(現在の滋賀県米原市朝妻筑摩)と目していると考えられる。そこから、前句に具体的な地名はないが、万葉1817、1818歌が共に「霞たなびく」と詠んでいることから朝妻山を重ねており、よって付句の「波」は琵琶湖の波であるとも考えることができよう。

(二折・裏・三) 伊吹おろしぞ波に残れる

三十九 舟渡す夜中に月はかたぶきて

【校異】 わたす…⑤⑥⑪⑬わたる⑩いたす⑭渡□(虫損) は…④の⑤そ

【式目】 秋(月) 舟(水辺・休用之外(新式今案)) 月(光物) 月与月(可隔七句物) 夜分(月・夜中)

【語釈】 ○舟渡す：対岸に舟を漕ぎ渡す。「小田もる山のをちかたのみち／ふねわたす里の河上雁なきて」(三島千句 第二百韻・54／55)。

【付合】 伊吹おろしの強い風の中、進んでいく舟だが、風は残っていても、月は早くも沈んだと対比し付ける。「春の夜ふかくおきてこしみち／かすみつ、月はかたぶく山の端に」(葉守千句第四百韻・玄清／盛安・72／73)。

【一句立】 対岸に舟を渡す、夜中のうちに月は傾いていて。

【現代語訳】 伊吹おろしの風の強さは、波の立ちぶりに残っている。その風を受け対岸に舟を渡す夜中、早くも月は傾いていて。

【他出文献】 三十八句・三十九句の付合は『下草』旅連歌555・556に入る。

（二折・裏・四） 舟渡す夜中に月はかたぶきて

四十 待つに深（ま）ての星合やうき

【校異】 深（ま）ての…①②④⑫つくての⑮更行 やうき…③そうき⑬（の）やうき（そ）

【式目】 秋（星合） 恋（待つ・うき）

【語釈】 ○待つ（ま）に深（ま）て…待つうちに夜が更けて。秋の夜は長いが、その長い夜も恋人を待っているうちに更けてしま
い、やがて明け方になってしまふ。「秋の夜のながきかひこそなかりけれ待つにふけぬる有明の月」（新古今集・秋
上・題知らず・右大将忠経・421）。「秋のよの長きを契るかひやなきまつに更けぬる星合の空」（後鳥羽院定家知家入
道撰歌（家良）・39）。「まつにふけぬる袖のあき風／はしちかく山のはうとき月にねて」（芝草句内岩橋・224／225）。

○星合…陰曆七月七日に、牽牛星と織女星が会うこと。「一夜トアラバ、ほしあひ」（連珠合璧集）。「中たちも思ふほ
とをはよもしらし／月ないそぎそほしあひのそら」（下草（宮内庁書陵部本）・秋連歌・261／262）。

【付合】 前句の状況を、陰曆七月七日の夜のこととして付けた。陰曆七月七日の月は、真夜中頃に沈んでしまふとこ
ろから、七夕の二星は、会えてもすぐ朝の別れの時になってしまふ。

【一句立】 相手を待つうちに更けてしまふ、星合の夜のつらいことよ。

【現代語訳】 対岸に舟を渡そうとしている夜中にはや陰曆七日の月は傾いてしまい、相手を待つうちに更けてしま
う、星合の夜のつらいことよ。

（二折・裏・五） 待つに深（ま）ての星合やうき

四十一 秋を契り暮をたのむもいたづらに

【校異】 ちぎり…⑨⑩たのみ たのむ…⑨⑩契

【式目】 秋 恋（契り）

【語釈】○秋を契り…秋に逢うことを約束し。「この比は宿の梢も色付ぬ／秋を契りし人やきまさん」(月村抜句・1078)。
 1079) ○暮をたのむ…あの人と会えると夕暮れ時を心頼みにすること。「ふたよまでよがることはなければもくれ

をたのむるあか月もがな」(有房集・よをへだててあふこひ・337)。

【付合】前句で述べられた「憂さ」がなぜ生じるのかを付けた。

【一句立】秋に逢うことを約束し、夕暮れ時を心頼みにしていたことも、無駄になつて。

【現代語訳】待つうちに更けていく、星合の夜のつらいことよ。秋に逢うことを約束し、夕暮れ時を心頼みにしていたことも、無駄になつてしまつて。

(二折・裏・六) 秋を契り暮をたのむもいたづらに

四十二 猶いつまでの思ひならまし

【校異】なし

【式目】恋(思ひ)

【語釈】○猶いつまで…それでもいつまで…。「初霜の岡の秋かせさむき夜に／なをいつまでとをしねもるらん」(宝徳四年千句第十百韻・利在／専順・41／42)。
 ○思ひならまし…気持ちなのかしら。「事たらすおもひな佐そ墨の袖／今いくほとのか身ならまし」(美濃千句第五百韻・宗祇／守保・21／22)。

【付合】付句で恋心に対する疑問を呈して、恋からの離れを意図する。

【一句立】それでもいつまで思い続ける気持ちなのかしら。

【現代語訳】秋に逢うことを約束し、夕暮れ時を心頼みにしていたことも、無駄になつて。それでも猶いつまで思い続ける気持ちなのかしら。

(二折・裏・七) 猶いつまでの思ひならまし

四十三 仮の身をはじめなき世にうけ初めて

【校異】 はしめなき…⑨⑩定め無 うけ…⑨かけ

なお、原文は「うけ初て」、注釈本文で送り仮名を補っている。

【式目】 釈教(仮の身) 身(人倫) 人倫与人倫(可嫌打越物)

【語釈】 ○仮の身…この世に仮に生きている身。「かりの身をむなしとしらばよの中のみちをもなかさとらざるべき」(中院集・尺教・199)。「ふりも定めぬ水のあは雪／かりの身はいつくともなく住なして」(紫野千句第二百韻・相阿／有長・10／11)。「出んま遅くおもふよの月／かりの身に其暁を待もうし」(熊野千句第九百韻・常安／宗怡・76／77)。○はじめなき…初めもわからない。「月のみやはじめなき世の昔よりいまにかはらぬ同じおもかけ」(伏見院御集・懷旧月・2004)。「はじめなき月のゆくへに身をかへてさらば心のはてをしらばや」(拾遺愚草員外・一字百首・秋・48)。

【付合】 前句の「思ひ」を、人間世界に仮に生まれての多種多様な思いと取りなした。

【一句立】 仮に生きるこの身を、初めも何もわからないこの世に、初めて受けて。「はじめなき世のならひさへうぶの神そひはてぬみをなに作りけん」(雪玉集・姉小路基綱・6129)。

【現代語訳】 仮に生きるこの身を、初めも何もわからないこの世に、初めて受けて。そんなふうでも、いつまで心に思いつける気持ちかなのかしら。

【他出文献】 四十二・四十三の付合は、『下草』(書陵部本) 雑連歌下 1167・1168 (はしめなき世と) に入る。

(二折・裏・八) 仮の身をはじめなき世にうけ初めて

四十四 誰をうらやみ誰をくたさむ

【校異】 うらやみ…①うらみや くたさむ…④かこたむ⑩かこたん⑬くたさん

【式目】 雑 誰（人倫） 人倫与人倫（可嫌打越物）

【語釈】 ○くたす…けなす。「みのりのためと薪こる人／山かつとなれるをおもひくたさめや」（延徳四年三月三日初何百韻・78／79）。「わひぬるとも身をはくたさし／たらちねやかゝる我をも祈るらん」（萱草・雑連歌・1473／1474）。

【付合】 人間界に生を受けても、煩惱からなしてしまふ迷妄のふるまいを示す。

【一句立】 誰を羨んだり、誰を貶めたりするのだから。

【現代語訳】 仮に生きるこの身を、初めも何もわからないこの世に、初めて受けたのに、誰を羨んだり、誰をおとしめ非難したりしようとするのだから。

（二折・裏・九） 誰をうらやみ誰をくたさむ

四十五 咲かぬ木も時しる花の一さかり

【校異】 なし

【式目】 春（花） 花近年或為四本之物余花は可在其中（一座三句物）（新式今案）

【語釈】 ○咲かぬ木…花が咲かない木。樹勢の良い時であっても、花がつきにくい木。この語に、華々しい活躍もできない我が身をなぞらえる句は宗祇に多い。「むかしの春そ人にとはれし／老ぬれば花さかぬ木に身をなして」（菟玖波集・雑連歌一・藤原貞直・2107／2108）。「身のいたつらにきえんとやする／むかしたに花さかぬ木の老の末」（美濃千句第三百韻・専順／宗祇・26／27）。「咲ぬ木も風や恨みん花盛」（老葉（毛利家本）・春の発句の中に・1607）。「咲ぬ木に花をなぐさむ心かな」（萱草・春上・55、老葉（毛利家本）1612）。「さかぬ木に花まち出る若ば哉」（自然齋発句・春・495）。○時しる…時節を得た、時節をわきまえた。「長夜すからすてにあげぬる／庭鳥のをのか時しる音を鳴て」（菟玖波集・雑連歌三・藤原長泰・2853／2854）。「松ひとり富士に時しる紅葉かな」（萱草・大田備中入道の山家にて、富

土松の紅葉を・433、宇良葉・富士松の紅葉したるをみて・315)。○一さかり…ひととき盛りであること。「ときをうるともあやうきをしれ／世こそた、風まつ花の一さかり」(三島千句第八百韻・34／35)。

【付合】人間たちがそれぞれに争う様を、「咲かぬ木」に一時期咲いた花たちの様子に代えて付けた。

【一句立】花が咲かない木であっても、花の時と知り、ひととき咲いた花がその盛りを見せている。

【現代語訳】花が咲かない木であっても、花の時と知り、ひととき咲いた花が盛りを見せている。そんな花も、多く咲いている中で競い合っているのだろう。互いにどれを羨んだり、どれを貶めたりするのだろう。

(二折・裏・十) 咲かぬ木も時しる花の一さかり

四十六 山は緑の春深き色

【校異】いろ…⑨頃⑩ころ⑮色^{イロ} みとり…⑪たより^{ミト}

【式目】春(春深き) 山(山類・体)

【語釈】○春深き…春が深まり、たけなわの頃。「花ちりしきのふの鐘は(の) 又なりて／あを葉のはやし春ふかきころ」(三島千句第一百韻・29／30)。

【付合】一本の桜から、視点を山全体に広げた。

【一句立】山は一面の緑となり、春が深まる頃の色となった。

【現代語訳】花が咲かない木であっても、花の時季と知り、ひととき咲いた花が盛りを見せている。山は一面の緑となり、春爛漫の色となった。

(二折・裏・十一) 山は緑の春深き色

四十七 霞こぐ海人のつり舟遠き江に

【校異】なし

【式目】春（霞） 海人（水辺・用） つり舟（水辺・体用之外（新式今案）） 江（水辺・体）

【語釈】○霞こぐ：霞の中を漕いで行く。和歌では管見に入らず、連歌においても珍しい表現。「須磨の浦のなぎたるあさはめもはるに霞にまがふあまのつり舟」（新古今集・「春、すまのかたにまかりてよめる」・藤原孝善・159）。「柳木ふかき里のさひしき／霞こく棚なし小舟近き江に」（玉屑集・春・宗養・173／174）。○海人のつり舟：漁師の釣り舟。「月はなをやすらふ春のあさほらけ／浦かくれ行あまのつり舟」（葉守千句第一百韻・宗長／宗悦・23／24）。○遠き江：遠方の入江。「遠き江のたく火は海士の家めかと紅葉によする秋の船人」（拾塵集・江紅葉・865）。「きりにまきるゝ人のおもかけ／遠き江にさほさす船のをとはして」（桜井基佐句集（斑山文庫本）・997／998）。

【付合】山類の光景に水辺の光景を相對して付けている。

【一句立】霞の中を漕いでいく漁師の釣り舟が、遠方の入江に見えていて。

【現代語訳】山は一面の緑となり、春爛漫の色となった。一方、霞の中を漕いでいく漁師の釣り舟が、遠方の入江に見えている。

【他出文献】四十六・四十七の付合は、『下草』（書陵部本）春連歌、5・6に入る。

（二折・裏・十二）霞こぐ海人のつり舟遠き江に

四十八 浜名の橋をただにやは見む

【校異】なし

【式目】雑 橋只一 御階一 梯一名所一 浮橋一（一座五句物・水辺（体用之外）） 浜名橋（名所）

【語釈】○浜名の橋：遠江国浜名郡にある浜名湖に渡された橋。遠江国の歌枕。現在の静岡県湖西市新居町。貞観四年（862）にかけられ、以後何度も流出と修復を繰り返した。明応七年（1498）の大地震で地形が変わり、永正七年

(151) 流出後には再建されなかつた。「かぜわたるはまなのはしの夕しほにさされてのぼるあまのつりぶね」(続古今集・雑下・題不知・前大納言為家・1730)。宗祇の『浅茅』にも遠江国の名所として「浜名橋」が見える。○ただに：単に。くだけ。「むめの花ただにやはみむはるさめにぬれぬれぞなほをりやしてまし」(躬恒集・はる・224)。「尋よといひしもとほぬ草のいほ／軒もる月をたゝにやは見ん」(桜井基佐句集(斑山文庫本)・429/430)。この語は第七十一句でも使われている。

【付合】前句の「遠き江」を遠江と取り、遠江国の歌枕「浜名の橋」を付ける。この四十八句「浜名橋」を媒介として、春(四十七句)から秋(四十九句)へと情景を切り替える。句の移りのうちに時の流れと共に海から天へと地理的な広がりを感じさせていく転換である。「波につづく霞の色やいかならんはまなのはしの松の梢に」(拾玉集・5625)。

【二句立】浜名の橋をただ見るだけなのであろうか。

【現代語訳】霞の中を漕いでいく海人の釣舟は、遠江の遙かな入江にかかる浜名の橋をただ見るだけなのであろうか。

(二折・裏・十三) 浜名の橋をただにやは見む

四十九 すみわたる月にいそぐな天つ雁

【校異】 いそくな③□(空白) いそく

【式目】 秋(月・天つ雁) 雁春一(二座二句物)

【語釈】 ○すみわたる月：曇りなく皓々と照る月。二すみわたる月影とほく引くしほのはまなの橋にかかる旅人(永享百首・橋月・御製(後花園院)・470)。○天つ雁：空にいる雁。雁は秋に北方から飛来し、春に帰る渡り鳥である。

「露けさぞそのこゑならぬあまつ雁去年もかくこそさきしね覚に」(宗祇集・本能寺日誉法印坊にて、同じ心を(暁雁・稿者注)・108)。○月にいそぐな：月が美しく照らしている下、急ぐことはしないでくれ。「庭の菊に山ぢいそぐな今朝の月」(自然齋発句・1209)。

【付合】前句で名所である浜名の橋を出し、付句では、飛び去る雁に、月光の下の浜名の橋の絶景をゆっくり眺めようと呼びかける。なお、「浜名の橋」に「雁」を詠む歌は、朝霧の中の景として最勝四天王院障子和歌に集中的に見られる。「又やみん雲井の雁にこととはんはまなのはしの秋霧のそら」（最勝四天王院障子和歌・浜名橋遠江・慈円・342）。

【一句立】澄みきつた月の夜だから、急いで飛んでいかないでくれ、天の雁よ。

【現代語訳】浜名の橋をただ見るだけなのだろうか。今夜は皓々と澄みきつた月の夜だから、急いで飛んでいかないでくれ、天の雁よ。

【他出文献】四十八・四十九の付合は、『下草』（書陵部本303・304、東山御文庫本311・312等）に入る。

（二折・裏・十四） すみわたる月にいそぐな天つ雁

五十 小萩うつろふいねがての里

【校異】 うつろふふ：①うつろふ^ふ②⑬うつろひ さと：⑦⑧比^{比イ}⑩さと⑬さと^{ころ} ころ

【式目】 秋（小萩） 里（居所・体）

【語釈】 ○小萩：小さな萩。また萩の美称。「萩トアラバ、…小萩」（連珠合璧集）。小萩が末枯れて色あせるのは、秋が次第に深まっていくさま。「小萩うつろひ小鹿鳴く道／薄散る尾上の宮の跡古て」（竹林抄・秋・心敬・340）。第九句にも見られる語。○いねがて：肌寒く、眠りにつけないこと。「あきはぎのしたば色づく今よりやひとりある人のいねがてにする」（古今集・秋上・題しらず・よみ人しらず・220）による。萩の下葉が色づく頃には、肌寒い、夜寒となる。また、月も物思いを誘い、寝られない。「秋の月いかなる物ぞわがころなにともなきにいねがてにする」（新勅撰集・秋下・題しらず・小野小町・283）。「いねがての小夜更かたに雁鳴て／枕に月も音つれて行」（河越千句第六百韻・長敏／心敬・93／94）。「いねがての夜寒をたれかわひぬらん／松に風ふく月のやまさと」（心玉集・

秋・1080／1081）。

【付合】 秋空の様子に、地上の様を付け、上から下に向かう視線を意識させ、天地を相対させる。秋の月の輝く空に、飛び去り消えていく雁と、地面近く、次第にうら枯れていく萩とは、いずれも冬に向かう時の流れを感じさせていく。

【二句立】 小萩が色あせて枯れていき、肌寒さに人はなかなか寝つけない、そんな里。

【現代語訳】 皓々と澄みきった月の夜だから、急いで飛んでいかなくておくれ、天の雁よ。小萩が色あせて枯れていき、肌寒くなって人はなかなか寝つけない、そんな里の上を。

和歌の引用は、特に断らない限り、日本文学で『図書館内』『新編国歌大観』によるが、『草根集』『伏見院御集』『後花園院御集』は『新編私家集大成』により、『万葉集』は西本願寺本による。

【訳注引用文献一覧】

連珠合璧集：『連歌論集一』（昭和四七・三弥井書店）

聖廟法楽千句及び注：天理図書館綿屋文庫編『俳書叢刊第一卷』（昭和六三復刻版・臨川書店）所収綿屋文庫本

看聞日記紙背連歌類：『図書寮叢刊 看聞日記紙背文書・別記』（昭和四〇・養徳社）

下草（宮内庁書陵部本）：『連歌大観一』

下草（東山御文庫本）：『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）

徒然草：新日本古典文学大系『方丈記 徒然草』（一九八九・岩波書店）

伊庭千句：古典文庫『千句連歌集七』所収松井明之氏蔵本

老葉（毛利本）：『連歌大観一』

老葉（吉川本）：『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）

寛正六年正月十六日何人百韻：伊藤伸江・奥田勲『心敬連歌訳注と研究』（二〇一五・笠間書院）所収大阪天満宮文庫本

- 自然齋発句：『宗祇発句集』（一九五三・岩波書店）
萱草：『連歌大観一』
- 新撰菟玖波集：『新撰菟玖波集全釈』（三弥井書店）
那智籠（北野天満宮本）：古典文庫『那智籠（北野天満宮本）』（昭和五二）
桜井基佐句集：古典文庫『桜井基佐句集』（平成七）
芝草句内岩橋：『連歌大観一』
- 宝徳四年千句：『千句連歌集三』所収城崎温泉寺本
享徳二年千句：『千句連歌集三』所収小松天満宮蔵本
葉守千句：『千句連歌集六』所収北野天満宮蔵本
東山千句：『千句連歌集六』所収内閣文庫蔵本
顯証院会千句：『千句連歌集二』所収内閣文庫蔵本
美濃千句：『千句連歌集四』所収大阪天満宮文庫本
熊野千句：『千句連歌集五』所収静嘉堂文庫本
紫野千句：『千句連歌集一』所収静嘉堂文庫本
菟玖波集：『連歌大観一』
- 三島千句：『千句連歌集五』所収鶴見大学本
竹林抄：新編日本古典文学大系『竹林抄』（一九九一・岩波書店）
文明十四年九月廿日何船百韻「そめよなほ」：国際日本文化研究センター連歌データベース
年次不詳何木百韻「花は色に」：『連歌百韻集』（昭和五〇・汲古書院）
- 表佐千句：古典文庫『千句連歌集四』所収大東急記念文庫本
愚句老葉：『連歌古注釈集』（昭和五四・角川書店）所収版本
池田千句：『千句連歌集七』所収静嘉堂文庫本
延徳三年十月十五日何木百韻：『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）

河越千句：『千句連歌集五』所収内閣文庫本

心玉集：『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）

長六文：『連歌論集二』（昭和五七・三弥井書店）所収大阪天満宮文庫蔵一紙品定合綴本

老耳：『連歌大観二』

浅茅：『連歌論集二』（昭和五七・三弥井書店）所収尊経閣文庫本

※本稿は JSPS 科研費 JP17K02421「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。